

伊勢物語の助動詞について

楠田克

敬		發 自				能 可				身 受				種類		
らる	る	らゆ	ゆ	らる	る	べかり	べし	らゆ	ゆ	らる	る	らゆ	ゆ	らる	る	基本形
られ	れ	万 らえ	え	られ	れ	べから	べく	らえ	え	られ	れ	万 らえ	え	られ	れ	未然形
源 られ	源 れ	万 らゆ	万 え	源 られ	万 れ	源 べかり	源 べく	万 らえ	万 え	源 られ	源 れ	万 らえ	万 え	源 られ	源 れ	連用形
源伊 らる	源 る	万 らゆる	万 ゆ	源 らる	源伊 る	源万 べかる	源万 べし	万 らゆ	万 ゆ	源 らる	源 る	万 らゆ	万 ゆ	源伊 らる	源伊 る	終止形
源 らるゝ	源 るゝ	万 らゆれ	万 ゆる	源 らるゝ	源 るゝ		源万 べき	万 らゆる	万 ゆる	源 らるゝ	源 るゝ	万 らゆる	万 ゆる	源 らるゝ	源 るゝ	連体形
源 らるれ	源 るれ	万	万 ゆれ	源 らるれ	源伊 るれ		源伊万 べけれ	万 らゆれ	万 ゆれ	源 らるれ	源 るれ	万 らゆれ	万 ゆれ	源 らるれ	源 るれ	已然形
源 られよ	源 れよ		万	源	源		源	万	万	源	源	万 らえよ	万 えよ	源 られよ	源 れよ	命令形
受身に同じ		受身に同じ								それ以外の動詞の未然形				接		
						但しラ變は連体形、 用言、助動詞の終止形、				動四段、ナ變、ラ變、 以外の未然形、 動四段、ラ變、ナ變				續		

定指		比況	望					希							
たり	なり		ごとし	まほしかり	まほし	たかり	たし	こそ	べかり	べし	けむ	む	まし	らし	めり
たら	なら	ごとく	まほしから	まほしく	たから	たく	こせ	べから	べく	○	○	(ませ)	○	○	○
	源伊万		源				万	源万	伊			伊万			
たり	なり	ごとく	まほしかり	まほしく	たかり	たく		べかり	べく	○	○	○	○	めり	○
	源伊万	伊万	源	源				源伊万	源伊万						
たり	なり	ごとし	まほしかり	まほし	たかり	たし	こす	○	べし	けむ	む	まし	らし	めり	らむ
	源伊万	万	源	源	源	源	万		源伊万	源伊万	源伊万	源伊万	源伊万	源伊万	源伊万
たる	なる	ごとき	まほしかる	まほしき	たかる	たき		べかる	べき	けむ	む	まし	らし	める	らむ
	源伊万	伊万	源	源		源万			源伊万	源伊万	源伊万	源伊万	源万	源伊万	源伊万
たれ	なれ	○	まほしかれ	まほしけれ	たかれ	たけれ		○	べけれ	けめ	め	ましか	らし	めれ	らめ
	源伊万		源	源					源	源万	源伊万	源		源伊万	源伊万
たれ	なれ	○	○	○	○		(こそ)	○	○	○	○	○	○	○	○
							万伊								
体言	体言、用言、助動詞の連体形	体言+のが用言の助動詞連体形、連体形+が	同右	用言、助動詞の未然形		用言の連用形	動詞連用形		但しラ變は連体形	用言、助動詞の連用形	同右	用言、助動詞の未然形	同右	同右	用言、助動詞の終止形、ラ變は連体形

連体など可成り多用されている。伊勢物語ではこのように敬語の助動詞の使用が少ないので、注意してよく調べてみると、補助動詞「たまふ」が六十二例の他「おはします」「まつる」等の語のあることが発見された。伊勢物語ではこのような語を多く用いたために敬語の助動詞を必要としなかつたのかも知れないが、或は又伊勢物語時代には、前代の「す」はすたれ、次代の「る」以下の助動詞はまだ十分弁達して、なかつたためかも知れない。なお「しむ」は源氏物語においても連用形があるだけである。

「使役」では万葉集には「しむ」が用いられ、源氏物語では「す」「さす」が用いられるようになった。(尤も前記敬語の「しむ」は使役だと見る説もあるようである。)伊勢物語でも「す」「さす」は可成りの用例が見うけられる。なお平安時代では「しむ」は男子用語で、女子は専ら「す」「さす」を用いたため、「しむ」の用例が少ないのだと言われている。

「過去」の助動詞には「き」「けり」がある。これらは万葉・伊勢・源氏共に見られて、問題はなさそうであるが、その未然形「せ」「けら」は上代にのみあつて、平安時代には用いられなかつたといわれている。なるほど表では「けら」は万葉だけであるが、「せ」は伊勢にも源氏にも出てくる。しかし伊勢の一例、源氏の二例は共に和歌であつて、平安時代には和歌にのみ見られる特殊現象とのことである。なお「き」「けり」については多少調査していることもあるけれども、まだ不十分なので他日を期したい。

「未来」の助動詞には「む」「まし」があるが、これは推量の項でふれることにする。

「完了」の助動詞「つ」「ぬ」「たり」「り」は万葉・伊勢・源氏共に見られ、問題はなさそうであるが、「つ」の命令形は万葉と伊勢の

みで、「ぬ」の命令形は源氏だけに見られる。

「動作の継続」をあらわす助動詞に「ぶ」がある由であるが、これは上代にあるだけで、伊勢物語にも源氏物語にも見当たらない。

「推量」の助動詞には「らむ」「めり」「らし」「まし」「む」「けむ」「べし」「べかり」があるが、先ず問題になるのは「めり」である。

これは万葉集には見当たらない。山田博士は奈良朝文法史で、奈良時代にあると言われる僅かな用例はすべて疑わしいもののみであると言つて居られる。伊勢物語ではその確実な用例が見られる。次に「ま」の未然形「ませ」は主として上代に存在したもので、それ以後では歌にのみ見られる由であるが、伊勢の一例も歌である。これも過渡期を示す一例となるかも知れない。「べし」の已然形は源氏のみに見られるが、「こそ」の結びは万葉時代には已然形でなく連体形で結んでいたもので、そのせいで万葉には見当たらないのであろうか。伊勢物語にも見当たらない。

「希望」の助動詞は普通「たし」「たかり」「まほし」「まほしかり」とされているが、発生は何れも比較的新しく、伊勢物語には一例も見当たらない。万葉には「たし」の連体形が見当るのみで、「たかり」は源氏物語にもその用例がない。たゞし松尾聰氏の国文法入門によれば、万葉時代には希望の助動詞「こそ」があつて、伊勢にもその命令形「こそ」の変形「こせ」が一例あるといつて居られる。伊勢物語では「まほし」が「まほほしき」の形で三例見出されるのみである。このように伊勢物語には希望の助動詞はないといつてよいのであるが、では希望を示すにはどんな語をもつてしたかを調査してみると、助詞の「なむ」「がな」「な……そ」や助動詞「む」又は命令形の形で詠への気持を表現したりしていることが分つた。

「比況」の助動詞「ごとし」は、万葉集伊勢物語には見られるが、源

氏物語には見当らず、たゞ語幹の「ごと」がしきりに用いられている。

「指定」「なり」は三者共に見られるが、万葉では体言につくもののみで、用言の連体形につくのは見当らない。伊勢では連体形につくもの七例、体言に続くのは数多い。「たり」は三者共に見当らず、奈良時代は皆無で、平安時代でも稀にしか用いられていない由である。

「詠嘆」は「なり」と「けり」とであるが、「なり」は最近「伝聞」とされてきているが、まだ論議的となつていようである。表に見られる処では特に述べることもないが、「なり」の連用形は伊勢のみに見られる。

「打消」の「ず」「ざり」「じ」共に殆んど揃つた形を示している。「ず」を「て」「でうける」「ずて」の形は、平安時代には約まつて「で」となつたが、伊勢物語にも三十一例見られる。文章の簡潔な伊勢物語の文章をより簡潔にするに役立つと思われ。又伊勢物語は短歌を中心にした歌物語であるから、その語調を整えるのにより多く用いられたことであらう。「ず」はザ行とナ行とにまたがるゆえ、その語源についてはいろいろと言われているが、山田博士が平安朝文法史で「連用形の形として前期には『に』といふ形ありしが、この期にはその活勢を失いて僅かに『えに』といふ語にその面影を止むるのみ」と言われるその「えに」が、伊勢物語に一例見出される。「じ」の已然形は源氏物語のみである。「まじ」は万葉時代には「ましじ」で終止形連体形が存したが、平安時代になると「まじ」に代つた。伊勢物語では連用形「まじう」「まじかり」が各一例見出されるのみである。

以上表に基いて万葉・伊勢・源氏の助動詞を見てきたのであるが、伊勢物語の助動詞は、前代の万葉時代の名残をとどめるものがあるかと思ふと、次代の源氏時代の先駆をなすと考えられるものも見られてやはり両時代の中間的、過渡の様相を呈しているものようである。

(第三回卒業生)

卒業論文題目

第一回生

(昭和二十八年三月卒業)

石一 松瀬幸子

万葉女性歌の形成様相とその展開
萩原弼太郎「月に吠える」及び「青猫」の詩語にあらわれた音律美

上市原三津子

宇治十帖に関する試論「浮舟論」
万葉濁音に関する一考察

戸田みそら

栄華物語に現れた平安朝貴族の宗教生活に対する一考察

脇山ミキ子

高村光太郎論「智恵子抄」の詩と詩法

岩野幸子

(昭和二十九年三月卒業)

第二回生

建礼門院右京大夫の研究
漱石と鷗外―その青年論について

井上惠美(池袋)

宇津保物語の研究―特に家族婚姻係について―
芥川龍之介「羅生門」「戯作三昧」に表われた歴史小説家としての作風

奥村美津代(尾崎)

夏目漱石論―草枕を中心として―

手島和子

田中信子

植村美子

田山花袋論(私小説を問題として)
芭蕉晩年の人生観

嘉村克子

伊勢物語の助動詞研究序説
万葉集の助詞に対する一考察

楠悦子

私小説と志賀直哉

小日向玲子

島崎藤村論―あらわれたる婚姻形態―特に落窪物語について―
平安朝文学の旅

佐々木美佐子

露伴文学の中心として

高田豊子

宮本百合子の文学(道標)を中心として

土田孝子

樋口一葉論―その日記資料をめぐつて―
西鶴と近松の研究―共通素材を基礎として―

山田美恵子

啄木短歌の三行形成について
夏目漱石論―三部作―三四郎―それから―
「門」を中心として